
『SWORD OR SCYTHE』

稲木グラフィアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『SWORD OR SCYTHE』

【Nコード】

N6184Y

【作者名】

稲木グラフィアス

【あらすじ】

その世界には、大きく分けて魔族、獣人族、魔法族の三種の民族が存在していた。

魔人の長は世界を手にとろうと勢力を拡げていた。

そんな世界の中で、人工的に能天使の加護を受けさせられた少年、久也。

大好きだった女の子を失ってもなお『強くなる』という約束を果たそうとするため、軍の特殊機関で力を追い求める。
追い求めた先に何があるのか。

約束を果たした後に待っているものとは何か。
不定期更新ですが、なるべく早く更新したいと思います。

第一話『殺戮兵器』

「大丈夫、さやちゃん？」

「ひつく・・・ごめん、僕が」

孤児院でいつも一緒だったほのかちゃんはとても優しくかった。

「よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから」

「でも」

「じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね」

「うん、約束する！」

こういった具合に、ほのかちゃんは泣いている僕を慰めてくれたりした。

こんな関係がいつまでも続くと当時は思っていた。

「とくしゅのうりよくかいはず？」

ある日、僕は友達のはのかちゃんと一緒に遊んでいた。
そこを白衣を着た男の人が近づいてきた。

「ほのかちゃん、特殊能力の研究をしたいので、ついて来てくれな

いか？」

「ほのかだけ？」

「そうだけど？」

その時、僕はほのかちゃんが、帰って来なくなるような気がした。だから、

「僕も行く！」

そう言ってしまった。

僕達は孤児であつたため、孤児院に入っている。

すでに孤児院からほのかちゃんを引き取る事を許可されていたらしく、僕は無理矢理ほのかちゃんについて行つた。

「さやちゃん見て、ほのか達と同じ位の子がいるよ」

「本当だ。後で皆で遊ぼう」

「うん！」

先生についていくと何処かの研究施設に着いた。施設の中には僕達と同じ位の歳の子供がいる。

施設に入つてすぐに初めの能力実験に入った。

実験が一段落すると同じ実験を別の子にもする。その間、他の子は皆で遊んでいる。

そして、全員の実験を終えると、数日休んで二番目の実験にうつる。

そんなことを繰り返していくのだった。

そして月日が経ち、俺は14歳になった。

先生の実験は日に日に被験者にかかる負荷が増していった。

そう。被験者に傷をつける程に。

「・・・・・・・・っ！」

「ほのか!？」

ほのかの体には、沢山の包帯が巻かれており、とても痛々しかった。

俺にも巻いてあるが、ほのか程ではない。

それどころか、ほのかの包帯はうっすらと赤色が、つまり血が滲んでいた。

「大、丈夫。傷が少し痛んだだけだから」

そう言っているほのかの顔は痛みに歪んでいる。

「だけじゃないだろ！ 血が！」

「心配性だなあ、久也は。・・・・・・・・小さい頃に約束したよね？」

強くなるって。同じ実験をしているんだもん、久也が大丈夫なら私も大丈夫だから」

「でも！」

俺は声を張り上げた。強くなる以前にほのかにいらなくなってほしくなかったから。

「先生の実験を終えて、強くなった久也の姿を見せてよ」

「……………くっ、分かった。約束する」

俺の頬を涙が伝う。

「ほら、泣かないで。泣いていたら、強そうじゃ……………ない……………」

そこまで言っただけは力無く倒れる。

「ほのか？ 先生っ！ 先生えっ！！」

俺が叫ぶと先生達はすぐにかっつけて、ほのかを何処かの部屋につれていった。

そして、しばらくして部屋から先生達が出てくる。俺はすぐに先生に聞いた。

「先生、ほのかは？」

「大丈夫、少し体調が悪いたけだから」

「治るんですね？」

先生はもう一度「大丈夫」と言う。

しかし、俺の中では嫌な予感がしていた。

「じゃあ、久也君。ほのかちゃんが治ったら、強くなった君を見せてあげられるように、最後の実験、頑張ろっか」

「・・・・・・・・はい」

そうして、最後の実験を受ける。

最後と言っただけあって、体にかかる負荷は結構なものだった。

「・・・・・・・・ううっ!!」

「辛いかい、久也君？　だけど、我慢してくれ」

しかし、決して弱音は吐かなかった。

ほのかに、強くなった所を見てもらいたかったから。

結果的に言うの実験は成功したらしい。

先生達の様子を見てわかる。

それに、証拠として自分の手に剣が出てくるイメージをすると、白い剣がだせるようになった。

剣と言っても両刃ではなく片方にしか刃がなく、それでも刀に似た形状をしていた。

「強く………なつたんだよね？」

俺は「うんっ」と自問自答した。

「ほのか、見たらどをんな顔をするかな」

見回すが、周りには誰もいない。

俺は先生を探す事にした。

勿論、ほのかの様子を聞くためだ。

「先生、何処にいるのかな？」

探したが見当たらない。

歩き回っていると一つの部屋に行き着いた。

「ここは………」

そこは先生達が、入ってはいけないと言っていた部屋だった。
残っている部屋はここだけなので、入ってみることにした。

コンコン………。

返事がない。

俺はドアに手をかける。

ガチャッ………。

「開いてる？」

入ってはいけないと言うわりにはなんて無用心なだろう。

俺は部屋の中に入ったがその中に入ったのは

「何だよ………これ」

中には化け物のようなモノがいた。

「オオオオオオオオオ」と鳴き声のようなものを発している。

「………うえっ」

あまりの見た目に吐き気を催す。

人型でありながら奇形のように顔のような部分が至る所から飛び出しているのもあれば、アメーバのように形が不定形のものもある。

最初は魔物かと思ったが、人型で服を着ているものがいた。自分とおなじ格好だ。

「………これって」

「おやおや、随分と失礼な子だね」

後ろから先生の声が聞こえたので振り替える。

先生はニヤリと笑っている。

「………先生」

「君は一緒に遊んでいた子のことも忘れたのかい？」

「遊んでいた？」

この化け物の山が皆、人の子だというのはか！？
いや、待て

「ほのかは！？」

「『ほのか』？」

先生はしばらく考えて、思い出したように言う。

「ああ、あの不良品の事か」

「……不良品？」

俺は何が何だか分からなくなった。
ただ、ほのかに会いたかった。

そうでないとうにかなっていまいそうで。

「何処？ ほのかは何処？」

先生は相変わらずニヤニヤと笑っている。

やめろ。そんなふうに笑うな。
そう思った俺に先生は、

「ゴミはどうするか、わかっているだろう？ 君以外はまったくの
ゴミ素材だったよ。『実験の負荷に耐えきれなくなったゴミ』や『
実験で細胞が崩壊して化け物に成り果てるゴミ』とかね」

やめる。ほのかはゴミなんかじゃない！

「ここまでの道のりは長かった。」

先生は呟く。

「期待していたサンプルも駄目になり、私達の実験は失敗に終わるのかと思ったが、ようやく完成品を手に入れることができた。」

「俺達に何をした？」

俺がそう言うと、先生は背を向ける。

「君は『九天使の加護』というものを知っているかい？」

九天使の加護。それはその名の通り天使からの加護のことで、天使の第一位から第九位、つまり熾、智、座、主、力、能、権、大天使、天使からの九種類の加護がある。

九種類の加護にはそれぞれ違う能力があり、それぞれがとても強力な加護である。

天使の加護は15年に一度、世界中の九人の子供がそれぞれの加護を受けて生まれてくる。

「私達は九天使のなかで最も戦闘向きの加護、能天使の加護を人工的に受けさせる研究をしていたんだ」

俺は何も言えなくなっていて、ただ先生の話聞いていた。

「うあああああああああああああああああああああ
あああああ！」

俺は叫んだ。

怒り、悲しみ、怨み、哀れみの負の感情が入り混じった叫びだった。

突然、俺の手に黒い鎖鎌が現れる。

俺はその鎌で目の前の先生の体を真つ二つに切り裂いた。

ビシャアアと周りが赤く染まる。

「うっ……あぁ……」

俺の叫びに驚いて他の先生達が部屋に入ってくる。

「い、いねは……！」

「に、逃げっ！」

ド
ス
ッ
！

その瞬間、一人の先生の体に俺が降り下ろした鎌が串刺しになる。

俺が思いつきり鎌を引くと、その先生の体は背中の刺さった所から二つにわかれた。

一瞬で研究施設の中が騒がしくなる。

そこからは、逃げる先生達が一人づつ真つ二つにされていくとい
う殺戮が始まった。

「うくっ………っ」

俺は雨が降る中、1人泣いていた。

『よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから』

そんな中、

ほのかの言葉が浮かんでくる。

「ごめん………俺が助けるって約束したのに。守ってやれな
くて……ごめん」

『じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね』

「うん、強くなる。……誰よりも、絶対に」

だから、見ていてくれよな。

「約束………な？」

俺の頬をつたう液体はもう、涙ではなくなっていた。

第一話『殺戮兵器』（後書き）

学生なので更新が遅くなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

水面さんの感想を参考に改稿しました。

『水面さん』の感想を読ませていただきました。参考にさせていただきます。

ありがとうございます。

登場人物設定『主人公』

名前：楠木 ^{くすき} 久也 ^{ひさや}

容姿：（15歳時）黒髪ショートヘア、黒眼。背は168？。

武装：純白の剣

漆黒の鎖鎌

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給される銃。

デザートイーグル・50AE（魔装型）

人工的に能天使の加護を受けさせられた少年。大好きだった女の子、『ほのか』を人工的に能天使の加護を受けさせるという研究で失い、その怒りに身を任せて研究に携わった人を殺し尽くし、その研究所をも完全に破壊した後に『エドワード・グレイス』に拾われる。

> i 3 5 5 0 4 — 4 4 6 8 <

登場人物設定『主人公』（後書き）

楠木久也の容姿が書けました。自分のイメージ的にこんな感じですよ。

この他に学校で友達と一緒にリレーで書いてる『GATE』って作品でもナナと光というキャラも書きました。そっちの方も読んでください。

第二話『家族』

「・・・・・・・・」

俺は雨の降るなかを歩いていた。

冷たい雨は体温を奪い、疲労を与える。

研究所を破壊した後、俺は町を目指していた。

道を歩いていたら魔物が飛び出してきたので、今も白い剣と黒い鎖鎌は手に持ったままだ。

しばらく歩いていると、滝が流れている所に出た。

滝の裏は大きく窪んでいて、雨を凌ぐには充分だった。

空は灰色から黒に変わり始めていて気温は更に下がっていた。

明日、この川を辿っていけば人の居るところに着くはずと思い、俺はこの窪みで一晩を過ごすことにした。

火が欲しい所だが、木の枝は雨で湿っているし、上手く火を起さず自信がない。

仕方ないので、窪みの奥の方で丸くなすることにした。

「おやす・・・・・・・・」

そこまで言っただけで気がつく。

「誰も・・・・・・・・いないんだよな」

孤児院にいた頃はほのかが『おやすみ』といって、俺も同じように返していた。研究所にいた時も。

冷たい雨、湿っぽい地面。

聞こえるのは滝が流れ落ちる音と雨の音。

「・・・・・・・・」

相当疲労が貯まっていたのか眼を閉じると、すぐに眠ってしまった。

チュンチュン

「ん？」

俺は太陽の光で目を覚ます。

しかし、何故か冷たい地面で寝ていた筈なのに、俺の体はとても暖かった。

「・・・・・・・・っ！」

完全に覚醒する。

俺は何処かの家の中のベッドに寝かされていた。

「……は？」

いつの間にか着ている服が変わっている。

ベッドから身をお越し、周りを見渡す。
だが、誰もいない。

ガチャッ

ドアが開く音がした方向に身構える。

「そんなふうに身構えないでちょうだい」

部屋に入って来たのは女の人だった。
もしかしてこの人が俺を助けたのか？

「・・・・・・・・」

「警戒しなくても大丈夫よ。とって食う訳じゃないんだし。……
…はい、まずはこれ食いな」

その女の人は俺にスープが入った皿とスプーンを出してくる。

「・・・・・・・・スープ」

「冷めない内に食べなよ」

研究所を破壊した後から何も食べてなかった俺は腹が減っていた
ので、そのスープを喜んで頂いた。

「まる二日寝てたからお腹すいたでしょ」

「まる二日!？」

あんなところで寝てたからだろうか。

もし、助けてもらえなかったら、あそこでどうなっていただろう。

「食べながらでいいからさあ」

その女の人はスープを食べているのを見ながら、質問する。

「なんで、滝の裏なんかで寝てたのさ？」

「それは……………」

俺は研究所ことを話そうとした。

しかし、信じてもらえるだろうか。

話した所で

『冗談言っんでないよ』

と、返されそうだ。

「えっと、道に迷って」

「ふん？」

女の人は俺に疑いの目を向ける。

「冗談言っんでないよ」

俺の嘘はバレていた。

「嘘つくと、すぐに分かるんだから。伊達に母親やってないよ」

嘘をつくとすぐに分かるとなると本当の事を言つか、黙秘しかないか？

研究所にいた頃から思っていたけど、あの研究所は小さいものはなかった。

ならば、それなりの研究資金が必要だ。

それに、あんな研究施設を魔人族が放って置くはずかない。

たまたま、見つかっていなかったからかもしれないが。

「疑いませんか？」

「聞いてからにするよ」

「・・・・・・・・」

そんなことを言われたら言いにくくなるじゃないか。

「冗談よ、信じてあげるから」

「はい」

俺は研究所の事、その研究所を破壊した事を話した。

しかし、天使の加護のことは伏せておいた。

話を聞いた女の人は「ふうん」と納得した表情をした。

「もしかして、あれの事かな？」

そう言うと、女の方は部屋を出ていく。

俺はその内にスープを食べきった。

「…………ふう」

ガチャッ

俺がスープを食べ終わると同時に女の方が部屋に入ってくる。

今度は新聞を持っている。

「あなたが言った研究所ってこの事？」

そう言って、女の方が持ってきた新聞には見覚えのある風景が載っていた。

しかし、天使の加護云々ではなく、魔族に対抗する新型兵器の研究と記載されている。

一般に公開したくないのだろう。

「違う」

「そうなの？」

「いや、俺が破壊したのはこの写真の研究所だと思います。見覚えがありますし。でも、俺が破壊した研究所が研究していたのは、天使の加護を人工的に受けさせるというもの……あ」

しまった、言ってしまった。

なんで今、言っちゃったんだ？

バンツ！！

「今のは本当か！？」

いきなり男の人が部屋に駆け込んで来た。

「あんた」

「君、今言ったことは本当なのか？」

男の人は凄いい勢いで詰め寄って来る。

女の人が『あんた』と言ったあたり、男の人と女の方は夫婦なのだろう。

「えっと……あの」

「こら、あんた。この子も驚いてるじゃないの」

「す、すまん」

どうしようか迷っていた俺を見て女の方は、俺に詰め寄っていた

男の人を俺から離す。

「えっと、天使の加護のことは本当です。俺は能天使の加護を受けています。」

証拠のために白い剣を出して見せる。

それを見て二人は目を見開き、開いた口が塞がらないといった様子になっていた。

「うーん」

「な、なんですか？」

男の人はなにやら考え始める。

「天使の加護を受けている人は珍しくない。でも、君の話だと君自信、裏の事情を知っている事になるね」

「はい……………」

やがて、夫婦二人でなにか話し始めた。

すると二人の意見が一致したように同時に頷く。

「なら、ここにいい」といい

「はあ!?!」

予想外の言葉に声が裏返る。

何を言い出すんだこの人は。

裏の事情を知ってしまった俺の存在を、その裏の人が知ってしまったら何をされるかわからない。

勿論、俺を匿ったりすればただではすまないだろう。

「なんで、そうなるんですか？」

「大丈夫だ。私はこれでも軍の特殊育成機関の教官でね、君ひとり増えてもちゃんと家族みんなで充分な暮らしはできる。」

「そんなこと聞いてません。なんで、俺を匿うんですか？」

まあまあと女の人が俺を落ち着かせる。

そして、食べ終えていたスープレの皿を片付けた。

「私はそこまで偉い立場じゃないから君を助けてあげられるのはほんの少しだけ。残りは自分でどうにかすることだ。君は天使の加護を受けてまだ間もない。なら、私がいる軍の特殊育成機関について、力をつけたらどうだ？」

「だから、なんでそこまで？」

「私はね、面倒なことに首を突っ込むのが好きでね」

「そうよ。この人は昔からよく面倒事に巻き込まれるの。でも、退屈しないわ」

夫婦二人はどう意見のようだ。

完敗だ。なんて、返したらいいか分からなくなった。

まあ、断って出たってでも止められないだろうが、どこにも行く宛がないのでお世話になるのは結構だ。

それに、強くなるために軍の特殊育成機関で力をつけるのはいいことだ。

「ありがとうございます。えっと」

「エドワード・グレイスだ」

「サニー・グレイスよ。後、娘のモニカがいるわ」

「あ、はい。楠木久也です。今後、よろしくお願いします」

第二話『家族』（後書き）

主人公設定のところに主人公のイメージを書きました。

第三話『試験勉強 接近戦闘編』

俺がグレイス家にお世話になって1ヶ月がたち、エドワードさんが言った軍の特殊育成機関に入るため、入隊試験の勉強をしていた。

「はああああ！」

俺は今、グレイス家の一人娘モニカと一緒にエドワードさんに試験の第一科目『戦闘技術』について教えてもらっている。

俺達は木剣を使っていた。

モニカは俺と同じ年らしく、親が教官なので、軍の特殊育成機関に入るため練習をしてきたらしい。

「そこっ！」

俺は大振りなモニカの隙をついて木剣をモニカの脇腹に叩き入れる。

一応、革の鎧を身に付けているが多少の痛みが伴うはずだ。

「くうっ！」

苦しそうに顔を歪め、踞るモニカ。

「大丈夫か！？」

「モニカ！？」

俺とエドワードさんは心配して駆け寄る。
すると、

「隙ありっ!」

反射で避けようとするがモニカの木剣は俺の脛に当たり、『力
コーン!』と乾いた音が響いた。

「いっつったああ!」

俺はあまりの痛さに転げ回る。

「足がああああ!」

弁慶の泣き所を木剣で思いっきり叩かれたのだ。痛くない何て言
うやつがいても俺は信じない。

「油断禁物って事よ」

「卑怯な!」

「戦争にはルールがないのよ」

なんてやつだ。

分かった。そっちがその気ならこっちだって、

「モニカ! もう一度勝負だ」

「いいわよ、受けてたつわ。その代わり負けた方は何でも一つ、勝
った方の言うことを聞くこと!」

「俺はいいぜ。いいですよ、エドワードさん?」

このやり取りは一週間程前から繰り返していた。

やり取りの発端はモニカからだった。

今と同じように戦闘技術を教えてもらっているときに、なんとモニカは俺に向けて木剣をぶん投げてきた。

とつさの事に反応できず、木剣は俺の顔面に直撃。

そこからは、怒った俺がもう一度といって、あのやり取りになる。

「いつもの事だろ? どうぞ」

エドワードさんは何気無い顔で言う。

エドワードさんは最初は止めたが、俺達の勢いに負けて、今ではこんな感じだ。

「その約束、後悔すんなよ?」

「その言葉、そのまんま返すわ」

俺達是对峙して睨み合う。

数秒の間の後、先に動いたのはモニカだった。

「ええええい!」

「はっ!」

俺はモニカの斬撃を木剣で受け止める。
競り合いながら俺達は睨み合う。

「いつもこのパターンね」

「なら変えてみたらどうだ？」

「言われなくてもっ！」

モニカは木剣を弾くと、今度は木剣を横に薙ぐ。

「くっ！」

俺はそれをバックステップで躲すと、今度は俺から斬り掛かる。

モニカは体を反らして躲し、距離をとる。

「今日は調子がいいわ」

再び対峙する。

俺の斬撃を躲すのはいつもの事。

しかし、そこから距離をとるのは初めてだ。

「今度は俺からっ！」

俺は木剣をしっかりと握ると、モニカに斬り掛かる。
モニカはそれを弾くと、今度はモニカが斬り掛かる。
しかし、俺は弾かれた後、一定の距離をとったので、モニカの斬撃は空を切った。

「あつぶね」

「そつちもパターンを変えたのね」

「当たり前だ。パターンを変えた相手に合わせて、変えてるからなつ！」

俺は木剣を横に薙ぐ。

モニカはそれを弾いて斬り掛かろうとするが、俺の体は再び一定の距離をとっていた。

ヒットアンドアウェイというやつだ。

「何逃げてんのよ！」

「逃げてないぞ？ 立派な戦術だ」

「ヒットアンドアウェイね。面倒な真似を」

そう言うつと、モニカは木剣を構え直し、「ふう」息を吐く。

「来なさい！」

「そう言われなくてもそのつもりだ」

俺はモニカに斬りかかる。

だが、今度は離れるつもりはない。

「おりゃあー！」

「ふっ！」

モニカは俺の斬撃を躲す。

それに合わせて俺は慣性の法則に逆らい、モニカに斬りかかる。

「もらった！」

「……………」

しかし、モニカはそれも躲す。

「なっ？」

「えええい！」

俺の木剣はモニカの斬撃で弾かれる。

モニカの攻撃は大振りだが、一回集中すると集中が途切れるまでは、物凄い反射を見せる。

それを忘れていた。

モニカとの戦闘で一番気を付けなければならない所だというのに。

俺はその動きに反応できず、モニカの木剣が胸部に当たる。

「うぐっ！」

俺は胸部の痛みに踞る。

「私の勝ちね。さて、何をさせようかしら」

モニカは俺に勝った余韻に浸りながら『約束』の事を考える。

モニカが踞った時に心配して駆け寄るじゃなかった。
二重の意味で。

「もう少し敗者を労ったらどうだ？」

「何よ。負け惜しみ？」

この女ー！（怒）

「これで勝ったと思うなよ！」

「それ、負け役の台詞」

ぐっ、言い返せん。

だが、今度勝負する時は負けないように対策を練っておくか。

モニカの集中した時、どうやって気を逸らすかか？

こうして、負けた方は次にどうやって勝つか、勝った方は負けな
いように練習をする、というのを繰り返していくのだった。

登場人物設定 『ヒロイン』

名前：モニカ・グレイス

容姿：（15歳時）金髪、ショートヘア、碧眼、背は165？

武装：ロングソード（独自の魔術で強化してある）

シールド（ロングソードと同じく魔術で強化してある）

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成機関から支給されるもの。

グレイス家の一人娘。先代から強い魔術耐性を持っている家系で、攻撃魔術を主な攻撃手段としている相手にとってはかなりの脅威。久也とは互いにライバル視している。だが、同時に心を寄せる場面もある。

第四話『試験勉強 魔術編』

試験第二科目、『魔術』

エドワードさんが所属している育成機関は、対魔族のために結成された機関だ。

魔術を使う魔族達に対して、魔術で対応する。

だが、グレイス家は先代から『魔術耐性』が強いらしい。

そのため、『攻撃魔術』は使えない。

しかし、自身を強化する『強化魔術』は使えるらしい。

それに比べ、俺は

「ふんっ………だあ！」

「何で力んでるのよ。ただのイメージなのよ？」

人には保有魔力量というものがあって、人によって最大魔力量は違うが、俺のように天使の加護を受けている人は膨大な魔力を保有しているらしい。

また、魔術には魔法属性があって、属性によって使える使えないがあるが、天使の加護を受けている人は『飛行』の魔術が使えるらしい。

魔術のコツは自分の頭の中でイメージを固め、呪文を唱えること。

簡単そうに思えて、実際にやってみると、とても難しい。

天使の加護を受けている人ならできるはずの『飛行』の魔術に挑戦している。

「……………、飛翔^{フガ・イク}せよ！」

しかし、なにも起こらない。
普通ならフワッと飛べるようになるらしいが。

「くそっ、もう一度っ！」

目を閉じてイメージをする。

地面からフワッと、重力が無くなったように体が軽く……………。

「……………、飛翔^{フガ・イク}せよ！」

「……………っぷ」

なにも起こらないのに、モニカの吹き出す声ははっきりと聞こえた。

悔しいな。何としても成功させたいものだ。

なんでなにも起こらないのだろうか。
俺は人工的に天使の加護を受けているが、加護を受けていることに変わりはないはず。

呪文が違ったのかな？

「呪文って、飛翔^{フガ・イク}せよであってるよな？」

「多分ね」

モニカはどうでもよさげに返事を返す。
本気でどうでもいいんだろう。

「………跳躍^{シ・サルトム}せよ！」

そう唱えると力いっぱい地面を蹴る。
すると、体が地面から高くジャンプする。

跳ぶ事はできるんだけどな。

だが、

「飛翔^{フガ・イク}せよ！」

飛行の呪文は成功しない。

俺の体はフワッと飛べるようにならずに地面に落ちる。

「止まれ^{ストップ}！」

俺の体は地面に落ちる事なく、空中で停止する。

だが、これは止まっているだけであって飛んでいるわけではない。
これではいいだ。

俺はスブシストを解くと、地面に着地する。

スブシストは元々敵に向かってかける魔術だ。

敵に向かってかけるとその動きを止めることができる。

だが、ある程度の魔力があったり、得意属性だったりすると効果は無い。

難易度の低い魔術だしな。

ちなみに、スブシストは風属性だ。

「なんで、できないんだ？」

「さあね。コンバリス・コルプス身体強化ができればそれでいいんじゃない？」

コンバリス・コルプスは自身の体を強化する魔術だ。

コンバリス・コルプスを使うことで超人的な身体能力を得ることができる。

ある程度の魔力があれば誰でもできる無属性魔術なのだ。

また、魔術は集中力を失うと強制解除されてしまう。

「俺はお前みたいな集中力は無いんだよ」

「え、負けを認めるの？」

「違えよ、馬鹿」

モニカは驚異的な集中力を持っているが、俺にはそれが無い。

この際、空を飛べなくていい。
空を自由に動き回れればいい。

「あ……………」

「何？」

「試してみるか」

俺はまた、目を閉じてイメージをする。

今度はフワッと飛べるようになるんじゃない。
空中で跳び回るのだ。

空気を蹴る俺の姿をイメージする。

ベス・ヒナトウス
「翼の足っ！」

俺はジャンプする。

そして何も無い所に踏み場をイメージする。

そこに、足をつけると……………、

「おっ？」

「えっ？」

俺の体は空中に立っていた。

何も無いのに、『そこに立っている』というのは、違和感があるな。

「おおっ？」

次に他の場所にも踏み場をイメージし、そこに足をやると

「よしっ！」

確かに手応え、いや足応えがあった。

トントントンと空中を歩く。

「できた！」

「『飛んでる』というより『歩いてる』ね」

モニカの声は俺には届かない。

何故なら、俺は見えない踏み場を歩いて空に登っているのだ。

俺は地上に戻ると、

「っしゃあ！ アイ、キャン、フラアアアイ！！」

と、叫んだ。

「飛んでないじゃん！」

モニカが突っ込む。

「いや、跳んだ」

「字の違いでしょ！」

「似たようなものだろ？」

「全く違うわっ、発音以外」

これで俺も空中で戦うことができる。

俺が喜んでいると、エドワードさんが「できたのか？」と言って家からでてくる。

「はいっ！ できました」

モニカは「できたのかなあ」と納得していないようだ。

「よし、じゃあまた模擬戦でもするのか？」

「………あ」

俺らは一緒の家に住んでいるとは言え、勝負をしている内にだんだんお互いをライバル視していた。

今は模擬戦をするつもりはなかったが、エドワードさんの言葉で意見が一致した。

「モニカ」

「いいわよ？」

俺達はエドワードさんから木剣を受けとると互いに構える。

「ルールはいつものやつに魔術をプラスしたのでいいよな」

「致死性のあるのはダメよ？」

「分かってるって」

「コンバリス・コルプス
「身体強化っ！」」

俺達は同時に唱え、斬りかかる。

モニカは跳躍し、俺はさっきできるようになった魔術を使う。

ペス・ピナトウス
「翼の足っ！」

コンバリス・コルプスとペス・ピナトウスのコンボで、俺は空高く跳び上がる。

「えええい！」

「はあああ！」

木剣同士がぶつかり合う。

モニカは空中で停止する魔術を使っていないので地面に着地する。

「やっぱりジャンプじゃ不利かなあ？」

そう言つとモニカは目を閉じる。

ベス・ピナトウス
「翼の足っ！」

「なっ！？」

なんとモニカは俺と同じ魔術を使つてきた。

「お前！ それ、できたのか？」

「見てたからね。これでフェアよ」

小癪な。

俺はモニカに斬りかかる。

モニカはそれを受け流す。

「はっ！」

受け流された直後にくるモニカの斬撃を、俺は見えない踏み場を跳んで躲す。

だが、それだけでは終わらない。

モニカは俺が躲した先を読んでいたように、木剣を振る。

さすがの集中力と言ったところか。

モニカの斬撃をギリギリで防ぐが、すぐに次の斬撃が来ると思いきや、モニカは回し蹴りを繰り返す。

「ぐふっ」

革の鎧越しに蹴りの衝撃が響く。

俺は魔術を強制解除される。

魔術を強制解除されて、俺の体は地面に向かって降下する。

だが、強制解除されたなら、また使用すればいい。

魔術を主な攻撃手段としている人と違って、俺は主に剣で戦う。

ある程度なら連続使用しても、保有魔力が尽きる事はないだろう。

「ベス・ヒナトウス
翼の足っ！」

ウルジェント・ケイエルムを再び使用し、空中に立つ。

そしてモニカの方を見る。

「はあっ！」

モニカは俺がウルジェント・ケイエルムを使用するのと同時に斬りかかってくる。

「くっ！」

俺は地面に降りる。

同じようにモニカも地面に降りる。

「コンバリス・コルプス
身体強化」

再び自分の体を強化する。

「はあああ！」

「てやああああ！」

俺達は同時に斬りかかる。

木剣で競り合うと、身体強化で得た身体能力のせいで、木剣がギシギシと軋む。

「流石に木剣が耐えられないな」

「なら、勝負をつける？」

「もちろん。………シ・アクセレラチオ加速せよっ！」

その瞬間、周りの動きが遅くなって見えた。

シ・アクセレラチオは自身の体感時間を速める魔術。
だから、周りの動きが遅くなって見えたのだ。

しかも、コンバリス・コルプスと平行して使用することでコンボとなり、身体能力が更に向上する。

だが、それゆえに体にかかる負担が半端なものではない。

「はあ!？」

俺の動きに、モニカの集中力も追い付かず、反応できずにいる。

俺はモニカの後ろに回り、モニカの動きを封じ、首筋に木剣を当てる。

「俺の勝ちだな」

「久也、そこまでやる？」

俺はモニカの返事を聞いて魔術をすべて解除する。
モニカの方も解除したようだ。

こうして、今回の勝負は俺の勝ちに終わった。

第五話『試験勉強 射撃戦闘編』

試験第三科目『射撃技術』

この間は、魔術の試験勉強だったが、中には魔術が使えない人もいる。

そこで登場するのが射撃技術だ。

射撃と言うからにはもちろん銃を使うのだが、軍の使用している銃は普通とは違い、魔装使用となっている。

一般に魔装銃と呼ばれる魔装使用の銃は実弾の他に魔力を撃ち出す。

エドワードさんが言うには、軍は魔力を産み出す半永久機関を持っているらしい。

その半永久機関から産み出された魔力を圧縮し魔装弾として撃ち出すのだ。

ちゃんと銃創に入れて。

だが、魔術師の中にも銃を使う者もいる。

そう言うやつらは、銃創に入れてあった魔装弾が無くなると、自分の魔力を圧縮して装填する。

なぜなら、魔装銃にも利点があるからだ。

魔術で繰り出す攻撃は呪文を唱えなければならない。
強い魔術になればなるほど呪文は長くなることが多い。

魔装銃は威力は銃によって変わるが、毎回同じ威力の弾を撃ち出す。

距離の関係も出てくるが、魔装銃は引き金トリガーを引くだけで攻撃が可能だ。

そして、弾速が明らかに魔装銃のほうが速い。

「……………」

というわけで、今は射撃訓練をしている。

いつものようにモニカと勝負をしているが、今回は銃器を使うので射撃精度で勝負していた。

自分から数十メートルの距離にある的に狙いを定め、引き金に指をかける。

「……………」

ダンッ！

引き金を引くと銃弾が飛び出し、的を撃ち抜く。

「よしっ」

「はー、凄いわね」

「ほら、次モニカの番」

俺はアサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）を手渡す。

このアサルトライフルは軍の特殊育成機関で支給されるものとおなじ物らしい。

おそらく、エドワードさんの物だろう。

特殊育成機関で支給されている物とは言え、弾を撃ち出す銃なのだ。

扱いには十分に気を付けなければならない。

また、個人的に別の銃を使いたいと言う場合には、軍の許可とそれなりの金が必要になるとか。

ま、俺にはまだ関係無い話だ。

「うーん、遠いわね」

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）の射程は、約500メートル。

でも、狙いを定めるのは人の目。

モニカはスコープを覗く。

「・・・・・・・・」

そして、引き金を引く。

ダンッ！

弾は的の少し右に当たる。

「ああん、もう！」

「つしゃあ。俺の勝ち」

ガッツポーズをする。

今回初めて、モニカが狙いを外した。
つまり、俺の勝ちだ。

「うう。じゃあ、スナイパーライフルで勝負よ！」

そう言つとモニカはバレットM82A1を持ってくる。

「よし。まずは的を遠ざけてつと」

確か、バレットM82A1の有効射程距離は約2000メートル
はあつたはずだが、モニカはどこまで持っていくつもりだろう。

そう思っている今も、モニカは的を遠ざけるために、的をもって
走っている。

もちろん、コンパリス・コルパス身体強化を使っているようだが。

しばらくして、モニカが戻って来る。

「はぁ、はぁ、疲れたぁ」

「お疲れ様」

と言うよりの的をもって走っていくより、別の物を的にすれば良かったのではないかと思うのだが、言えばうるさくなるだろうからよしておく。

「まずは、私からね」

息を整えて銃を構える。

「・・・・・・・・」

そーっと、引き金を引く。

バーンッ！！

大きな発射音と共に、マズルブレイキから噴出する発砲煙と、それに巻き上げられた砂埃が拡散する。

「「ゲホッ、ゲホッ！」」

二人して咳き込む。

「ほ、ほら。次、久也の番」

え、まじでやるのか？

今の砂埃をもう一回吸うのは嫌だぞ。

「どうしたの？ 逃げるの？」

む、逃げると言っただか？

「おし。やってやる」

そうして、俺はスナイパーライフルを構える。

うーん。まだ口の中がじゃりじゃりする。

「一気にけりを着けてやる」

そう言っただ、俺は的から離れる。

「無理よ、そこからなんて。いったいどれだけの距離が」

口のなかじゃりじゃりしながらも、引き金を引く。

バーンッ！！

巻き上げられた砂埃が晴れて的を見る。

弾は的のど真ん中を貫いていた。

「・・・・・・・・」

モニカは目の前で起きた事が信じられない、と言った顔をしてい

る。

「モニカが撃った距離が約1000メートル。」

それに比べ、俺が撃った距離が約2000メートルなのだ。
しかも真ん中に命中。

そりゃ、驚く。

「口、濯いで来る。モニカは？」

「えっ？ ああ、行く」

俺達は水道へ、向かった。

「久也って、あんなに上手かったっけ？」

「ま、才能って奴かな」

俺はモニカの二倍の距離で当てたんだ。
勝ち誇っていいだろう。

「・・・・・・・・」

「その視線止めてくんない？」

「いや、久也ってこんな奴だったっけ？ と思って」

「ごめん。自重する」

「グルルルルル……」

近くで何発もの銃声が聞こえる。

それは人がいるということだ。

その魔獣は飢えていた。

とにかく何か食いたい。

食わなければ死んでしまう。

魔獣はゆつくりと銃声が聞こえる方へ歩いていった。

第五話『試験勉強 射撃戦闘編』（後書き）

自分の学校では、テストまであと一週間に入りました。

次の投稿は時間がかかりますが、今月中にはしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6184y/>

『SWORD OR SCYTHE』

2011年12月1日16時58分発行